



# 卓 話



## 「私が仕えた東商の名物会頭」

元東京商工会議所 常務理事  
日本ファッション協会専務理事  
川村 耕太郎氏

今日は東京商工会議所について少々触れたあと、私が仕えた永野重雄氏をはじめとする東京商工会議所の会頭達についてエピソードを交えながらお話したいと思います。



商工会議所はマルセイユが発祥の地です。ハンブルクなどヨーロッパに広がっていきました。なぜかイギリスでは発展しませんでした。やがてアメリカにも広がり、日本で設立されたのが明治11（1878）年、創立者は洪沢栄一氏です。この洪沢氏を朝日新聞がとりあげ、最後に彼から影響を受けた永野氏のお話をして欲しいということで私の話が記事になりました。東京商工会議所は銀座の現在日産自動車がある場所に構えられました。日本の商工会議所は欧米との通商交渉のなか、日本には世論や商工業者の意見をまとめる機関がないという欧米の主張により、大久保利通を中心とする視察団がヨーロッパをまわった末、ドイツ型の商工会議所を手本につくられたものです。現在でもヨーロッパは全てそうですが、当時企業は全部強制加入ということで税金により商工会議所の費用は賄われていました。戦後になってアメリカ型が取り入れられ、現在は自由加入、自由脱退となっています。ただしドイツ型の名残を法律の上では留めており、経団連、同友会は社団法人、日経連は任意団体でしたが、商工会議所だけは戦後唯一、国会議員全員一致で可決されたという商工会議所法でできています。

経団連、日経連は戦後にできたものです。経団連は、経済団体連合会、自動車連合会などの団体が集まり、戦後自由貿易になって日米の資本取引自由化の交渉など民間の代表として活躍しました。同時に国民政治協会をつくって政治に大変な圧力をかけてきました。この中心人物が花村仁八郎氏という大変な人物でその後JALの代表にもなった人です。日経連は当時の総評、太田馨氏が労働組合に対し労働問題に関する経営者側の団結を図り、全般的な方針を

し、指導することを主な目的として設立しました。同友会は経営者個人が参加しているため、オピニオンリーダ的な性格を持った団体です。木川田一隆氏、牛尾治朗氏、現在リコーの桜井正光氏など、どちらかというところで活躍された方はやんちゃ坊主で、政治的にも平気で意見を言っていました。日経連は労働争議も終焉を迎えたため、経団連が吸収合併したという形で統合しましたが、これらの経済団体に商工会議所を含めた4つを揃えて俗に財界と言っていました。

さて、私の考える財界人の要件ですが、企業、産業のエゴではなく、国家的見地でものを考え、国際感覚があり、政治・経済に広く影響力をもって、オピニオンリーダーとして行動する力があること、さらにそれに加えて遊び感覚を兼ね備えた人だと思っています。この典型は洪沢栄一氏でした。彼はこうした要件を兼ね備えており、商工会議所をつくっただけではなく、当時の第一銀行、東京電工をはじめすべての産業を作った財界人の代表ともいえるのではないのでしょうか。そしてその洪沢氏に最後の影響を受け、こうした要件を兼ね備えた永野重雄氏をもって、私は戦後の最大の財界人と思っています。

永野氏は本気で2大政党を早くから主張してきた人でした。当時の社会党トップの佐々木氏や公明党の池田氏とも昵懇で、本人を呼んでとにかく2大政党をつくれと口説いていました。今、また道州制の議論が浮上していますが、47都道府県の時代は終わったのだと最初に道州制を唱えたのは永野氏です。経済界の人が自分の立場を超えて国家はこうあるべきだと真面目に、しかも自らその実現のために動いていたのです。その道州制の資料を大量に印刷し、総理をはじめ全国に配って遊説して歩きました。そういう意味で政治への影響力も強く、中川という赤坂の料亭で福田赳夫氏と大平正芳氏が総理の座を争った大福戦争の際に、ジャンケンで決めろと言ったというエピソードは先日の朝日新聞の記事に掲載されました。

国際的にも大変活躍していましたが、ちょっと誇大妄想狂かと思われるくらいのとんでもないプロジェクトに手を染めることもありました。それがパナマ第2運河です。スエズ運河を視察した際に、スエズの拡大は大きすぎて難しい、パナマ運河は短いのでこの運河をもう一度つくるか拡大すれば、太平洋と大西洋の間でもっと物資、特にエネルギー関係の

流通がよくなると本気になって自らパナマに出向いて働きかけました。この視察に私の上司が同行して、パナマの山の上で現地の食事をした時、他の人は誰も食べられなかったモノをおいしいと言って永野氏は全部たべたという豪傑ぶりだったそうです。この人はお寿司とラーメンが大好きだったのですが、私はパーティで彼を探すとき必ずお寿司のある場所に行きました。ソ連などにも出向き、当時大統領ゴルバチョフに総理の親書を持っていったこともあります。日本政府に北方領土を場合によってはお金で買えなどと平気で発言するような人でした。またソ連のチメニ油田をはじめとし、今里広記氏、中山素平氏の二人に支えられ、日本の石油確保のため積極的に活動しました。通産省事務次官であった山下英明氏が油田会社の社長になって中東に行く際に、永野さんは自分も同行すると言って山下氏とイラクの総理と交渉した、そういうことも平気でできた人でした。晩年は鉄鋼と牛肉の輸入に関する事で、農林省の役人を連れてオーストラリアに行ったのが、1984年になくなる一年前で最後の国際活動でした。また太平洋経済委員会を作って経済共同体を作ろうとし、これは五島昇氏に引き継ぎました。発展途上国の多いアジアの中で、アセアンが福田ドクトリンの下で統率され、シンガポールを軸にしてどうにか動きだしそうな時、オーストラリア、アメリカ、そして当時の中国に声をかけたのは五島氏でした。当時周恩来の流れを汲むまだ日中交流が幕開けたばかりの中国と第一回のミッションを仕掛けたのは五島氏です。永野氏も関わりたかったようなのですが、その頃、政治関係が厳しかったということで、五島氏が道を開くことになりました。私も40数回訪中していますが本当に今、商工会議所がした役割の大きさを再認識しています。

面白いエピソードの一つとして、永野氏は夜逃げをしたことがあります。富士製鉄の前身、富士精工所にいた時のことですが、夜逃げして川崎の宿屋に入り、一息ついたところで、やはり自分の家族だけでなく従業員の家族を考えて逃げるわけにはいかないと、その日のうちに渋沢氏のところに飛び込み、金策を頼んだそうです。渋沢氏はかねてから事情を知っていたのでしょう。その場で金を出してくれたと聞いています。また彼は一度左遷されています。北海道に左遷され、終生北海道に骨をうずめる覚悟であったけれども、結局は呼び出されて富士製鉄の社長になりました。その後、八幡製鉄との大型合併が話題になった時期に、私が直接担当したのですが、永野氏に「新日鉄と八幡製鉄の合併について経団連は一生懸命やってくれているが、商工会議所は何もしてくれないのか」と言われました。私は一企業のためにやるわけにはいかないと苦慮した末、特に大型合併を促進すべき法律を整備すべきだという産業再編成の要望書を作って永野氏に見せると、うれしそうに総理のところへ持っていきました。彼は陳情書をよくやりましたが、私は一回大変しかられたことがあります。総理のところへ要請に行くときに、俺一人でいくなら一人で行ける。俺は公人で

行く時、自分の意見を絶対に言わない。全国の商工会議所の意見をまとめて要請に行くのだということで、札幌から福岡まで、会頭の意見を今から電話をしてまとめろという無茶なことをいわれた覚えがあります。

この人はよく人を煙に巻きました。有名なのが消費税の問題です。実は消費税に関して永野氏は賛成でした。すると全国からものすごい電報やら電話、ファックスが入ったため、翌日ころっと変わって、記者会見では反対の意を述べました。本人が言うことには、そこでうそをついたと言われるかもしれないが、俺はあの時は個人の意見を述べたのだ、というようなことも平気で言うような人でした。また1兆円減税の議論の時に減税を了解したということでしたが、いざ記者会見の場ではなんと2兆円減税すべきであると公式に発言したのです。「会頭1兆円ではなかったのですか」と聞くと、「お前商売したことがないだろう、相手と取引するときはまず2兆円と出しておけばちょうど一兆円で収めることができるのだ。」と言われました。さらに、永野氏の話は主語と述語が明確でないため、やっかいで新聞記者で永野氏の話を理解できる人はなかなかいなかったようです。

商店街の視察などにも積極的でした。当時ダイエーの中内功氏が華々しく登場し、イトヨーカドーの伊藤雅俊氏や、ジャスコ・イオングループの岡田卓也氏が出てきて、まさにスーパーの台頭する流通時代を迎え、商店街と大紛争をしていた時期でした。私も担当しましたが大店法ができ、対立抗争が激化したとき何と永野さんが仲裁役を買って出、双方の意見を徹底的にいわせて妥協案を作りました。結果的にはなかなかうまくいかなかったのですが、このようなことを自ら買って出た鉄の人でした。また労働問題にも熱心に関わっていました。労働組合を持たない中小企業に同情的で、そうした労働者は家族まで入れてみんな未組織労働者だとして、この人たちのために労働省と大喧嘩をしました。もともと労働省と商工会議所は関係が良くなく、ことごとく商工会議所は会合法案などに反対してきました。とにかく永野氏は非常に未組織労働者に気を使う人でした。

趣味はというと彼は碁が好きで、柔道がとても強かったのです。また浄土宗で宗教的にも非常に信仰の厚い人でした。特に今日ここ、明治記念館、明治神宮は渋沢氏が明治天皇崩御の時に音頭をとって全国から献木を集めて建立したものです。戦後は政教分離をとって崇敬会という会ができましたが、その会長は代々商工会議所の会頭です。特に永野氏は大変力をつくされ、そのあと五島氏もしっかり後を引き継ぎました。永野氏はもともとお寺の家柄で比叡山、高野山といったお寺の再建のための寄付に大変熱心で、松下幸之助に電話をしてよく献金を勧誘していました。国際的に宗教を持っているということは大変信用されますが、永野氏はしっかり自分の国の宗教を説明できる、稀に見る日本の経済界の人でした。共同募金会にも熱心で、自分が国家公安委員をやっていた関係で自分の最後の秘書をやっていた人が半身不随になった時、自

分で引き取って自宅に住ませました。その時から交通遺児育英会を設立し、彼はポストが600位ありましたが、これは力をいれたことのひとつでした。面白いエピソードがあって、小山五郎など、当時の財界人を集めて上野の山を大掃除しようという呼びかけをしたことがあります。「日本はきたないと外国人にしょっちゅう言われるから日本は掃除しなくてはならない」と、真面目にかごを背負い、ねじり鉢巻きといういでたちで、財界人、商工会議所や経団連に声をかけて、上野公園を一日がかりで全部掃除しました。これがきっかけとなり、グリーン・ジャパン・センターという財団法人ができ、現在も続いています。このように非常に幅広い活動をしていたのです。

この永野氏の後を引き継いだ五島氏もやはりやんちゃ坊主といった一面を持っていました。五島氏のゴルフの腕前は最高シングル2だったのですが、彼にどうしてそんなにゴルフがうまいのか聞いたところ、五

島慶太のあとを継いでみたものの番頭が大勢いていうことを聞かない、頭にきて毎日ゴルフに行ったら上手くなったのだ、などと言っていました。ジャック・ニコラウスと一緒に私もまわった時には本当に見事な腕前を披露してくれました。この人はソフトの部分、特にファッション関係に非常に理解があり、日本を代表する東京コレクションを立ち上げました。そこからイッセイ・ミヤケが生まれ、ハナエ・モリが育っていったのです。ある意味ソフトの時代・・・流通時代を作ったのが五島氏といえるのではないのでしょうか。そのあと日本は建設ブームに入り、やがてゼネコン問題などが浮上してくる。そういう意味で高度成長期の最後、バブルの頂点の最後の会頭が石川六郎氏でした。今本当に経済界にはこうしたユニーク、かつ破天荒でそれでも国を思い、世界を思い、幅広い活動をする人がめったにおらず、私も良い時代の素晴らしい財界人達と出会えて本当に良かったと思っています。